

# おねずみおばさんの はなし



ベアトリクス・ポッター さく・え

おおくぼ ゆう やく

# おねずみおばさんのはなし



ベアトリクス・ポッター さく・え  
おおくぼゆう やく



このささやかな ほんは ネリーのもの。



むかしむかし あるところに 1びきの もりねずみが おりまして、 なまえを  
おねずみトマシーナおばさんと いいました。

すまいは いけがきの うらにある もりつちの なか。



これが おもしろい おうちなんです！ いけがきの ねっこを めぐって あっ  
ち こっちへ つちの めいろが できあがっていて、 そのさきに ものおきやら  
きのみや たねを たくわえておく くらが それぞれ あったりしまして。



だいどころや いまも ありますし、 それから しょっきべやや たべものおき  
ばまで。

あと おねずみおばさんの おやすみする へやも ありまして、 そこでは ね  
むる ベッドが ちいさな はこに なっているんです！



おねずみおばさんは 道を こえた きれいずきの ねずみさんで、 いつだって  
やわらかな つちの ゆかを はきそうじ ちりはらい。  
たまに まいごに なった はむしに でくわしますと、  
「しっ！ しっ！ ばっちい あしあしさんめ！」と おねずみおばさんは もって  
いる ちりとりを うちならすのです。



また あるひは ちいさな おばあさんが みずたまもようの あかい ケープを  
はおって うろちょろしておりました。  
「おたくが いま もえてるんですって、 ななほしおばさま！ おこさんのいる  
おうちへ とんで おかえりになって！」





べつの ひには まんまるした おおぐもが あまやどりに きておりました。  
「すいませんが、ここは マフエットちゃんのおたくでは ない？」  
「あっちへ おいき、この あつかましい わるぐもめ！ わたしの すてきで  
きれいな おうちの あっちこっちに くものすの はしきれ のこしくさって！」



そこで くもを まるめて まどから ほうりだしたのです。

くもは ほそながい いとを ちよいと たらして いけがきを おりていくしか  
ありません。



おねずみおばさんが はなれにある ものおきへ むかうところ。 ばんごはんに  
サクランボの さねと アザミの わたげを とりにいくのです。  
ろうかを すすむ あいだ、 ずっと ゆかを くんくん じっと みつめていま  
して。

「はちみつの においが するわ。 そとの いけがきにある クリンザクラ？ ど  
うも きたない ちいさな あしあとが あるみたい。」



かどを まがって ぱったり であったのが どじじずバビティ ——「じーず、ぶん、ぶーん。」と まるはなばちの おんなのこが しゃべります。おねずみおばさんは きつと あいてを にらみつけました。ほうきが あれば いいのに、 と。

「こんにちは、 どじじずバビティ。 みつろうを うってくださるなら、 ほんとに ありがたいんだけど。 でも いま ここで なにしてるの？ どうして いつも まどから はいってきて、 じーず、ぶん、ぶーん、なんていう わけ？」と いいながら おねずみおばさん だんだん はらが たってきまして。



「じーず、 うん、 うーん！」と どじじずバビティから かえってきたのは  
すねた なきごえ。 じりじり ろうかを うごくつと、 ぱつと そのの ものおき  
へと きえました。 どんぐりようの おへやです。

おねずみおばさんは クリスマスマえに どんぐりを みんな たべてしまいました  
だから、 ものおきは からっぽのはずなのに。

ところが かぴかぴの こけで なかが いっぱい、 ぐっちゃぐちゃで。



おねずみおばさんは こけを ひっぱがしはじめます。ほかにも 3, 4ひきのはちが あたまを だして ぶんぶん なきさけんでいました。

「まったく、わたしは ひとに まがしなんて してないってのに。かってに いすわってからに！」と おねずみおばさん。「いまから でてもらうからね ——」

「ぶん！ ぶん！ ぶーん！」 —— 「だれか ひとでが いるわね。」 「ぶん、うん、 うーん！」

—— 「ジャクソンさんは だめね。 ぜったいに あしを ふかないんだもの！」



おねずみおばさんは ひとまず ばんごはんの あとまで はちたちを ほうっておくことにしました。

いまへと ひきかえすと のぶとい こえで だれか せきばらいを しております。なんと すわっていたのは そのジャクソンさん ごほんにん！ ちいさな ゆりいすを はみださんばかりに すわりながら、 おやゆびを いじいじ、 だんろの さくに あしを かけて、 にたにたしているのです。

ごほんにんの すまいは いけがきの したにある みぞで、 そこは ひどくきたらしい じめじめした どぶなのでした。



「こんにちは、 ジャクソンさん、 あらまあ ずぶぬれで！」

「おおきに、 おおきに、 おおきに、 おねずみおばさん！ ちーと すわって  
かわかすさかい。」と ジャクソンさん。

こしかけたまま にたにた、 みずが うわぎの すそから したたりおちます。  
おねずみおばさんは モップを もって あたりを ぐるぐる。





あまりに ながながと いるので、 とりあえず ばんごはん たべていきますかと きくはめに なりまして。

まず だしたのが サクランボの さね。「おおきに、 おおきに、 おねずみおばさん！ けど、 はが のうて、 はが のうて、 はが のうての！」と ジャクソンさん。

べつに いいのに、 くちを ひろびろと あけまして、 なるほど はは 1ぽんも ありません。



つぎに だしたのが アザミの わたげ ー「ちゃっ、 ひゃっ、 ひゃっ！  
ぷーっ、 ぷーっ、 ぷう！」と ジャクソンさんは わたげを へやの あちこ  
ちに ふきとばしてしまいました。

「おおきに、 おおきに、 おおきに、 おねずみおばさん！ けど、 わいが ほ  
んとに ーほんとに ーほしいんは ーほんの ひとりのはちみつ  
なんや！」



「はあ すいません、 うちには ないと おもうんですけど。」と おねずみおばさん。

「ちゃ、 ひゃ、 ひゃ、 おねずみおばさん！」と にたにたする ジャクソンさん。「においが しよる。 ちゅーわけで わいは さそわれてきてん。」

ジャクソンさんは おもい こしを あげるや、 とだなのなかを あさりだしまして。

おねずみおばさんは ふきんを てに、 うしろから いまの ゆかに ついた しめった おおきな あしあとを ふきとっていきます。



とだなのなかに はちみつが ないと なっとくすると、 こんどは ろうかの  
おくへと すすみだしまして。

「あの、 あの、 たちまち つっかえますよ、 ジャクソンさん！」

「ちゃ、 ひゃ、 ひゃ、 おねずみおばさん！」



まず おしいったのは しょっきべやでした。

「ちゃ、ひゃ、ひゃあ？ はちみつ ない？ はちみつ ないなあ、おねずみおばさん。」

いたのは、おさらたてのうらに かくれていた、そろりそろり はっているむしが 3びきだけ。そのうち 2ひきは にげきりましたが、いちばん ちいさいのは ジャクソンさんに つかまってしまいました。



つぎに おしいったのは たべものおきば。 おちょうの おじょうさんが おさ  
とうの あじみを していましたが、 まどから そとへ とびさります。

「ちゃ、 ひゃ、 ひゃ、 おねずみおばさん、 なんや おきゃくが ようけ お  
るなあ！」

「だれも まねいてません！」と おねずみトマシーナ。



つちの ろうかを すすんでいると ——「ちゃ、 ひゃあ ——」「ぶん！  
うん！ うん！」

かどを まがったところで バビティと ばったり、 ジャクソンさんは ぱくっ  
と かみついて また ペっと はきだして。

「まるはなばちは すっきゃない。 ぜんしんの けが こうて かとうて。」と  
くちを そでで めぐいます。

「うせろ、 きちゃねえ かえるじじい！」と どじじずバビティの かなきりごえ  
。

「もう、 きが おかしくなりそう！」と おねずみおばさんも おかんむり。



おばさんが きのみの くらに とじこもっているあいだ、 ジャクソンさんが はちのすを ひっぱがします。 はちに さされるのは わりと へいきそうでした。

こころを きめて おねずみさんが くらから でてみると —— みんな どこかへ 行ってしまったようで。

でも そのちらかりぐあいが おそろしく ひどくって —— 「こんな きたならしいの みたことない —— はちみつの しみに、 こけ、 わたげ —— きたない あしあとが おおきいの ちいさいの あちこちに —— せっかくの すてきで きれいな わがやが！」





そこで こけと みつろうの のこりを かきあつめました。

それから そとへ でて、 えだを いくつか ひろってきて、 おもての いりぐちを はんぶん はめごろしてしまいます。

「ジャクソンさんの からだより ちいさくしてやる！」



そして やわらか せっけんと ニットの めのと おろしたての あらいだわし  
を ものおきから とってきました。 ところが つかれきって もう なにも で  
きません。 とりあえず いすで いねむりしてから、 ベッドへ いきます。  
「また ちゃんと もとどおり かたづくかしら？」と ふあんげな おねずみおば  
さん。



あくるあさ とっても はやくに おきると、 はるの おおそうじを はじめま  
して、 おわるまで 2しゅうかんも かかりました。

はきはき、 ごしごし、 ぱたぱた、 それから かぐを みつろうで こすっ  
たり、 ちっちな すずの スプーンを みがいたり。



ぜんぶ みごと かたづいて きれいに なりますと、 こねずみさんを 5ひき  
よんで パーティを ひらきました。 ジャクソンさんは ぬきです。  
しかし ごほんにんが パーティを かぎつけ、 もりつちのところまで やって  
きたのですが、 いりぐちが せまくて はいれません。



なので はちみつを どんぐりの おわんに 入れて、 まどから てわたし。  
ごほんにんも それで ぜんぜん かまわないみたいで。  
ひなたに すわって こう いいました。「ちゃ、 ひゃ、 ひゃ！ おげんきで  
なによりや、 おねずみおばさん！」

(おしまい)

The Original Text: *The Tale of Mrs. Tittlemouse* (1910)

The Original Author: Beatrix Potter (1866-1943)

## おねずみおばさんのはなし

<http://p.booklog.jp/book/34442>

著者：ベアトリクス・ポッター

訳者：大久保ゆう

発行：Alz

発行元情報：<http://p.booklog.jp/users/alz/profile>

※この翻訳は「クリエイティブ・コモンズ 表示 2.1 日本 ライセンス」  
(<http://creativecommons.org/licenses/by/2.1/jp/>) によって公開されています。  
上記のライセンスに従って、訳者に断りなく自由に利用・複製・再配布することができます。

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/34442>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/34442>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.